

SUMH News Letter

No. 48

～ Mr. They Pisal 追悼号 ～

ピサルさんを偲んで

途上国の精神保健を支えるネットワーク（SUMH）

理事長 青木 勉

ティ・ピサルさんは、カンボジア・タケオ州バチエに1966年2月6日に生まれた。父親は40歳の時に、ポルポト政権の肅清に会い、飢餓が原因で死亡したという。タケオ高校を卒業したのち、プノンペンにある軍隊の専門学校に2年間通い、1994年からカンボジア・シェムリアップ州でハーバード大学が開催した難民トラウマプログラムに参加し、精神科ソーシャルワーカーのトレーニングを5年間受けた。1999年にはワシントン大学がシェムリアップ州で開催したマネージメントのトレーニングを1年間受けた。そして、SUMHが主催した心理社会リハビリテーション実践家を養成するためのプロジェクトに2001年4月チームリーダーとして参加し2年間のトレーニングを受け、心理社会リハビリテーション実践家となった。そして、その51年間の生涯を閉じる2017年5月12日まで、約17年間にわたりSUMHと共にあり、カンボジアの精神障碍者とその家族のために働き、多くの業績を残した。

私は、2002年3月に家族とともに現地での研修に参加してからのお付き合いであるが、一番印象に残ることは、彼の温厚な笑顔と優しさである。彼は、2006年4月からSUMHカンボジア代表となり、

数え切れないほどの多くの困難の中でカンボジア地域精神保健を支え続けた功労者である。しかし、どんな時も笑顔を絶やさず、その労苦を微塵にも感じさせることはなかった。また、私が帰国する前には必ず行きつけのラーメン屋に連れて行ってくれ、ご馳走してくれる優しさを持った人でもあった。どれだけの心を病んだ患者さんが、彼の笑顔で癒されたことであろう。また、私も含めどれだけの友人や職場のスタッフが彼の優しさに包まれて、心の平安を得たであろう。

その笑顔の源について尋ねてみたことがある。彼は次のように答えた。「私は、あのポルポトの時代を生き抜いてきた」と。この時私は、極めて過酷な体験をも自己効力感に変えることが出来る彼自身の強さと対人関係能力、そしてそれを育んだカンボジア文化の豊かさを知った。今年3月に入って急激に体調を崩し療養生活に入ったが、病床でもSUMHの将来を案じ続けていた。彼は天に向けて飛び立ったが、彼が望んだ通り新たな現地スタッフも加わり、彼の遺志を継いで今日も活動を続けている。そして、私も間違なく彼の笑顔に生かされていることを日々実感している。「ピサル、本当にありがとう、天から私たちを見守っていてください。」心からご冥福をお祈りします。

2017年（平成29年）6月30日（年2回発行）	SUMH ニュースレター第48号(Pisalさん追悼号)
目次	IV. ピサルへの哀悼の意 篠原慶朗
特集 Mr.Tey Pisal 追悼号巻頭	V. ピサルさん 丸谷俊之
巻頭 ピサルさんを偲んで VI. ピサルさんへの追悼文 野崎章子	
途上国の精神保健を支えるネットワーク (SUMH) VII. 同い年の仲間 宮本圭	
理事長 青木勉	(国際医療福祉大学成田看護学部)
I. 現地代表ピサルを追悼する 手林佳正	VIII. 農村部の心を病む人々に届けた思い 青木利江
II. ピサルさんを偲ぶ	子
錦糸町クボタクリニック 窪田彰	学習会のお知らせ
III. ピサルさん追悼 窪田光子	編集後記 青木利江子

I 現地代表ピサルを追悼する

手林佳正



写真は2017年5月10日、バナックとビボルとの計7日間の on the job training を終えて、ぼくが帰国する日の半日を彼の自宅のベッドそばで過ごしたときのモノ。

久しぶりにピサルが笑った、と言われた。ただ、それは彼が亡くなる2日前ということになってしまった。

SUMH がカンボジア・シュムリアップ州で活動を始めたために、シュムリアップ川沿いに現地事務所を構えた2001年4月、玄関に見知らぬ来客があった。それがピサルとの初めて会った日だ。プロジェクト開始前のベースライン調査を始めるところで、引き続き2年カリキュラムで地域精神保健専門家を養成しようとしていた。受講者には基礎的な専門養成を受けていることを条件としていて、たとえば医師や准医師、大学心理学科卒などが集まっていたが、ピサルは精神保健NGO(前年に終了したHarvard大学ア

ロジェクト) 経験者でもいいかと質問した。以来の付合いだった。その頃、彼は父となり、彼とボリンの当時の小さな借家で誕生日祝いをしたが、その赤ん坊が15才となり、上の写真の部屋で再会した。

6名がその養成を終え、保健省のペーパー試験と口頭諮詢、実技試験にも全員が合格して国家資格 Psycho-Social Rehabilitation Practitionerを得た。うちカモルとピサルの2名がSUMHの現地活動を中心に担ってくれたが、しばらくして市内に家庭を持つピサルだけがプロジェクトに今まで残っていた。

彼は講義を進めるのに卓越していたし、保健分野で広い人脈を作り、またプロジェクト運営へ強い責任感をもつ努力家だった。これからは若いスタッフ養成などにも活躍してほしかった。彼の突然の重い病気の発見には驚かされたし、その早すぎる死は本当に残念でならない。合掌。

SUMH はプロジェクト実施の危機と直面している。残されたボリン医師と3人の子どもたちも、さぞかし深い喪失感の中にいることだろう。

II ピサルさんを偲ぶ

錦糸町クボタクリニック
窪田彰

あまりにも早く逝かれ、私は深い衝撃を受けています。

思い出すのは私たちの招待でピサルさんが日本に来られた時のことです。旭中央病院での研修を終えて、次に錦糸町クボタクリニックに来て約1週間滞在された時のこと思い出します。はじめは東京の高層ビル群に驚き、全ての道路が舗装されていることに驚いていました。そんな彼に御茶ノ水のホテルに滞在していただき、カードのスイカを1枚渡して

2017年（平成29年）6月30日（年2回発行） SUMH ニュースレター第48号（Pisalさん追悼号）
地下鉄の乗り方、JRの乗り方など一緒に都内を案内して回りながら教えました。理解は早く、翌日からはスイカを使って毎日錦糸町に通って来られました。

ちょうどピサルさんの滞在中に、私の還暦の祝いがありました。隅田川の花火大会の日でしたので、私の仲間たち約70人とともに屋形船を貸切って、川面からの花火をご一緒に見ました。暑い日でしたが参加した皆さんとも交流して、しきりにワンダフルと言ってくれているのを思い出します。

また、私が顧問医をしている江東区のグループホームのハウスミーティングにお連れしました。これは毎月1回、私がグループホームに行き入居メンバーたちと世話人と、夕食をともにしながらのミーティングです。世話人の桜井さんはカンボジアからのお客さんならカレーが良いだろうと思い、この日のメニューを日本式のカレーライスを中心に用意してくれたのです。ところが彼はカレーを避けて、ご飯だけを食べ始めたのでした。どうしたのと尋ねると彼は「辛いものは食べられない」というでした。東南アジアは辛い食事という先入観を打ち破る出来事でした。申し訳ないことをした思いになりましたが、彼はOK.OK.と言って食べ続けてくれました。もう一つの食べ物の思い出は、SUMHのメンバーでピサルさんの歓迎会として、代々木のカンボジア料理店に行きました。私たちは、カンボジア料理もいいねとか言って食べてたのですが、ピサルさんは「これはカンボジア料理ではない」というでした。どこがどう違うのか聞きそびれましたが、日本料理に飽きたんだろうと思って彼に故郷の料理を食べていただく試みは見事に外れたようでした。

その後にシエムリアップで環太平洋精神科医会議のシンポジウムを開催した時の、彼の活躍にはめざましいものがありました。世界各国と日本とカンボジアの精神医療関係者を集めてカンボジア厚生省の次官まで招き、次官とSUMHとの話し合いの機会も持てました。

思い返すとピサルさんに感謝することは多々あります。願わくば今少し長く生きて、カンボジアの精神科地域ケアの発展を見守っていただきたかったと思いますが、お互いの人生には限りがあります。許された人生の時間の中で、私たちと共にSUMHの活動の先頭に立って活躍してくれたことに厚く感謝したいと思います。ありがとうございました。

ご冥福をお祈りいたします。

III. ピサルさん追悼

窪田光子

精神障害の患者さんたちが、祈祷師や僧侶の伝統的な治療を受けていたカンボジアの20数年前に、

人々に精神の病気の理解や、あたらしい治療を取り入れようと熱意をもって活動されたピサルさん。東京に研修に来られた時は、御茶ノ水のホテルから、錦糸町まで、通勤され、朝電車どうでしたかと尋ねると、満員電車楽しかったと、答えていた笑顔のピサルさんが忘れられません。

カンボジアに行き、患者さんたちとデイケアの体験ができた時も、患者さんに信頼されているピサルさんの様子が頼もしく思われました。この情熱と、やさしさが、SUMHが続いてこられたのだと思います。あまりの速いご逝去に驚くばかりですが、ピサルさん、本当にご苦労様でした。心よりご冥福をお祈りいたします。

IV. ピサルへの哀悼の意

篠原慶朗

私はピサルの突然の訃報を聞いた際の驚きがまだ冷めていない。今年の3月初め、現地への送金の件で、ピサルとメールのやり取りをしていた時は彼が不調であることは知りもしなかった。3月末に、ピサルが病を患っていることを知り、それから1か月後に訃報を知った時の衝撃はまさに青天の霹靂だったと記憶している。

私がピサルと最後に会ったのは昨年2月に実施したスタディツアード。今でもあの時の彼の親しみに満ちた微笑みは忘れない。彼がいたからSUMHの活動がこれまで続けられてきたことを考えると、これからSUMHの活動に不安と寂しさを感じてしまう。きっと彼はSUMHの活動が続くことを望んでいる。その意思を引き継いでいこうとする次の世代と共に頑張っていきたい。ピサルへの哀悼の意を込めて。

V. ピサルさん

丸谷俊之

私がカンボジアのSUMHを初めて訪ねたとき、まず空港まで迎えに来てくれたのがピサルさんでした。滞在中、村で鎖に繋がれた未治療の統合失調症の患者さんを2例見ることができ、その後の経過を後にメールで送ってもらい、介入によって普通の生活に戻せることを事例を通して知ることができました。リハビリテーションや出張外来の見学の手配でもお世話になり、大変充実した一週間を過ごせました。今年の2月に久しぶりに現地で2回に分けて会うことができ、再会をお互いに喜びました。胃の調子が悪いとおかゆばかり食べていましたが、まさかここまで重大な疾患に罹患しているとは想像していませんでした。

2017年（平成29年）6月30日（年2回発行）SUMH ニュースレター第48号（Pisalさん追悼号）
でした。私たちの前で、なるべく元気に振る舞つ
ていたのかもしれません。合掌。

VI. ピサルさんへの追悼文 野崎章子

私は2016年3月に、初めてカンボジアを訪れ、シェムリアップ州に行きました。いくつかの国々を訪れた経験もありましたが、独自の言語や文化を有している国という点では、不安なことも多々ありました。また、気温が日本の猛暑日以上であり、体力的にも心配がありました。

そうしたところ、ピサルさんが優しい笑顔で空港まで迎えにきてくださいり、毎日、移動の前には必ず顔を見てくださいり、病院見学やアウトリーチでは同行してくださいました。キーパーソンミーティングでは、参加者と同じ立場から、参加者や家族のことを思いやって知識を伝えているという印象でした。

帰国の際には空港まで、現地のおやつを持って来てくださいり、「またいつでもカンボジアに来ることがあれば連絡して」と言ってくださいました。優しい笑顔で、かつ、細やかな気配りに、安心してシェムリアップでのスタディツアーフを終えることができました。同様に、日本から訪れる方々や、あちこちの患者さんや家族の方にも優しく、細やかに対応していらっしゃったのだと推察いたします。

また、きっと会えると思っていたのですが残念でなりません。ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。ピサルさんのご家族の皆様のご健康と発展をお祈り申し上げております。

VII. 同い年の仲間 宮本 圭

（国際医療福祉大学成田看護学部）

2002年4月、ボランティアで地域看護の講義を担当するため、シェムリアップ川沿いのSUMHカンボジア事務所を訪ねた日のことが懐かしく思い出される。Mr. Pisalは6名いる研修生のなかの一人だった。他団体で精神保健分野のソーシャルワーカーとして実務経験があったMr. Pisalは訪問時、利用者や家族に温かく関り、住民から信頼されていた。その後、彼は現地代表となり、SUMHを支えてくれたことに心から感謝している。

また、Mr. Pisal、同じ第1期研修生だったDr. Sorida（現・シェムリアップ州病院救急外来医局長）、そして私は同い年3人組で、不思議に気が合い、仲がよかったです。シェムリアップを訪ねたら、彼が今でも笑顔で迎えてくれる気がしてならない。冥福をお祈りしたい。



写真：精神科外来待ちの患者さんたち（クララーン保健区病院にて 2016. 3. 8）

VIII. 農村部の心を病む人に届けた思い 青木利江子

カンボジアシェムリアップ州のSUMHの活動でPisalさんとの思い出はたくさんあります。その中でやはり印象に残っているのは、2007年にカンボジアを訪問したときのことでした。SUMHが現地化（現地スタッフのみで現地活動を展開）し、これからSUMHは現地でどのような活動をしていきたいのか、何を課題にしていくのか、そのことについて一緒に何日も何時間も話をしました。そのときに彼が言ったのは、「農村で活動をしたい」ということでした。農村には鎖につながれたり、家に閉じ込められたり、苦しんでいる人々が沢山いる。こうした人々を救いたいのだと彼は訴えました。それから農村部の外来診療が始まり、亡くなるまで彼は延べ何千人という心を病む人々、そのご家族を救ってきました。その功績は大きく、これからもカンボジアの農村部の人々の心に彼の思いはきっと生き続けることと思います。最後に見たPisalさんは、農村部に精神保健を届ける往診車のクラウドファンディング達成記念の際、現地との中継で、スタッフに囲まれ手を振りほほえむ笑顔でした。家族共々長い間本当にお世話になりました。心より尊敬と感謝を込めて。天国

2017年（平成29年）6月30日（年2回発行）

SUMH ニュースレター第48号(Pisalさん追悼号)

で安らかにおやすみください。

す。なお今回の号は英文に翻訳し、現地のご家族、
スタッフにも送付する予定です。

編集担当 青木利江子

SUMH日本事務局

〒130-0013 東京都墨田区錦糸3-5-1

錦糸町北口ビル

TEL 03-3812-0736

HP : <http://www.sumh.org>

Mail : info@sumh.org

SUMH Cambodia

Mental Health Rehabilitation Center,

in Siem Reap Provincial Hospital,

Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia

Postal Address:

P.O. Box 93102 GPO Siem Reap Angkor, Cambodia

SUMHの会員として、また寄付金によって
一緒に途上国的精神保健を支えてください。

【年会費】一般 10,000円 賛助・学生 3,000円

【会費・寄付金の振込先】

銀行振り込みの場合

銀行名; 楽天銀行 第二営業支店(支店番号252)

口座名; 特定非営利活動法人 途上国精神保健を支えるネットワーク

口座番号; 普通 7385345

郵便振替の場合

加入者名; 途上国精神保健を支えるネットワーク

口座番号; 00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・
E-mail・会費と寄付金のいずれか・SUMHへ一言を明記の上、お振り込み下さい。

【学習会のお知らせ】

国際地域精神保健について学ぶ —カンボジアの地域精神保健活動を事例として—

開発途上国の地域精神保健に関心のある医療職や学生のみなさまを対象とした勉強会を以下の通り開催します。ご参加をお待ちしています。

日時：2017年7月16日（日）9:00～16:30

場所：錦糸町5F小ホール

言語：英語、日本語

参加費：SUMH会員無料 一般¥2,000 学生¥1,000

※先着50名？

主催：途上国精神保健を支えるネットワーク
Supporters for Mental Health (SUMH)

* 詳細はSUMH HPをご覧ください。

お問い合わせは学習会担当・宮本圭
(freedom_27kei@yahoo.co.jp)まで。

編集後記

ニュースレター48号は、2017年5月12日に他界した現地元代表のPisalの追悼号でした。

現在そしてこれまでPisalに関わった多くの方々が、Pisalのことを愛し、信頼し、カンボジアの地域精神保健のために共に活動をしてまいりました。今回の追悼号はそんな多くの方々の思いが伝わったのではないかと思います。現在はBibol、Vanakの二人の若者がPisalの思いをついで活動を継続してくれています。我々もPisalの思いを大切に、Pisalが築いたカンボジアに地域精神保健の礎を発展させ、継続していくことができればと思います。これかも引き続きご支援をいただけましたら幸いです。Pisalの高校生の息子は将来医師になることを夢見ているようです。いつかカンボジアの精神保健を彼の息子がPisalの思いを継いで活動してくれる日がくるかもしれません。そんな日を夢見ながらPisalが安らかに眠ることを心より祈ります。

今後ともカンボジアの地域精神保健を担う二人の若者の率いる現地活動に皆様からのあたたかいご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げま